

“The Blue Hotel” —孤立とテーマの—考察

上野利雄

1895年、多くの月日をかけ、西部及びメキシコへの旅に出たのは、クレインが23歳のときであった¹⁾。この旅行は Frederic Remington (1861—1909) の描いた西部の絵画や、Mark Twain の *Life on the Mississippi* (1883) 及び *Huckleberry Finn*²⁾ (1884) に刺激され、自らの目で Cowboys や大河の現実を確認したいと願っていたのも事実であるが、クレイン自身は次のように述べている。

When I was 23, I devoted most of my time to travelling for the Bachelier and Johnson syndicate and in writing short stories for English magazines³⁾.

この結果、西部を舞台として六篇⁴⁾の短篇小説が生れた。“The Blue Hotel” は、クレインが最後の三年を過ごしたイギリスの Brede Place⁵⁾において書かれた作品で、西部旅行を終えた三年後の1898年11月26日 *Collier's Weekly*⁶⁾にはじめて掲載され、翌年 *The Monster* に含まれて出版されたのである。

“The Blue Hotel”には、登場人物、風景⁷⁾、西部の信条⁸⁾など、クレイン自身目撃した事実が利用されているのは当然であるが、劇的効果を与えている情景描写は、彼一流の、imagination と irony から成立している。Fort Romper は、彼が西部への第一歩を印したネブラスカ平原の、とある小さな町をモデルにした架空の名前である。この Story は九つの Section からなり、架空の町 Fort

Romper にある、Palace Hotel の描写からはじまる。

The Palace Hotel at Fort Romper was painted a light blue, a shade that is on the legs of a kind of heron, causing the bird to declare its position against any back ground. The Palace Hotel, then, was always screaming and howling in a way that made the dazzling winter landscape of Nebraska seem only a gray swampish hush. It stood alone on the prairie, and when the snow was falling the town two hundred yards away was not visible. But when the traveler alighted at the railway station he was obliged to pass the Palace Hotel before he could come upon the company of low clap-board houses which composed Ford Romper, and it was not to be thought that any traveler could pass the Palace Hotel without looking at it⁹⁾.

この冒頭に示される象徴的な描写、荒涼とした大草原に、雪を背景として、いつも “screaming and howling” しながら、ただ一つポツンと立っている青ペンキ塗りのホテルは、主人公 the Swede のもつ「恐怖」と「孤立感」を見事に象徴している。

このホテルの主人、Pat Scully は、青いホテルのけばけばしさだけでは満足せず、毎日

朝夕には、Romper に停車する客車を出迎え、客引きに腕をふるうのが習慣だった。或る朝、彼は三人の客を連れてホテルに帰ってきた。一人は、西部についての誤解と偏見から、恐怖に体をふるわせ、眼の動きのすばやい the Swede で、もう一人は、ダコタ州境近くの農場へ行く途中の、背の高い、日焼けした the cowboy、三人目は、東部から来た、口数の少ない小男の the Easterner であった。ホテルの部屋では巨大なストーブがごろごろと音をたてていた。Scully の息子 Johnnie と農夫のじいさんがカードゲームをやっていたが、the Swede は益々恐怖にかられ、一人一人をこっそり品定めし、猜疑心のとりことなっていた。昼食の席でも、ホテルの主人 Scully とだけ少ししゃべり、自分はニューヨークから来た者で、十年間仕立屋の仕事をやっていたと自分から言い出したが、Scully の話はほとんど聞いておらず、眼はたえず男から男へと彷徨っていた。

Finally, with a laugh and a wink, he said that some of these Western communities were very dangerous; and after his statement he straightened his legs under the table, tilted his head, and laughed again, loudly. It was plain that the demonstration had no meaning to the others. They looked at him wondering and in silence¹⁰⁾.

「西部には大変危険な町がある。」という the Swede の、異様で奇怪な行動をともなった恐怖は、だれにも理解されなかった。

「たぶんこの部屋では、大ぜいの人が殺されたんだろうな。」とか、「生きてはここを出られない。」とわめきちらす the Swede の本心を知るのは“..... it seems to me this man has been reading dime-novels, and he thinks he's right out in the middle of it — the shootin' and stabbin' and all.¹¹⁾” と考える東部の小男 the Easterner ひとりであるが、

その彼も、理解を求める the Swede に対して「おれにも、あんたのいうことは分らない。」と冷やかに答えるだけであった。宿泊客を大切に考える Scully は善人ぶりを大いに発揮して、ホテルを出るべく二階の自室へ行った the Swede の後を追い、元気づけようとウイスキーをのませた。ウイスキーに酔った the Swede は、偽りの勇気かられて傲慢になり、自分からカードゲームに男たちをさそい、Johnnie がいかさまをしたと責めたてた。激しい口論の後、遂に一同立ち会いの下、殴り合いの決斗が戸外で行われた。たけり狂う風に、地面から雪片が吹きあげられる中で、Johnnie を打ちのめした the Swede は、いよいよ傲慢な言葉をはき、人々に嘲笑的な一瞥を投げつけるとホテルを出た。町のとある酒場に入った the Swede は、たっぷりとウイスキーを飲み、バーテンの止める声をよそに、テーブルでカード遊びをしている the Gambler に酒を無理やり押しつけた。「いらぬおせっかいは止めてくれ。」と穏やかにいいきかせる the Gambler の喉もとを気狂いのように掴んで、“What? you won't drink with me, you little dude! I'll make you then! I'll make you!” とどなり散らす the Swede は、結局 the Gambler に刺し殺されてしまった。

The corpse of the Swede, alone in the saloon, had its eyes fixed upon a dreadful legend that dwelt a-top of the cash-machine. “This registers the amount of your purchase.”¹²⁾

この the Swede の死は実にアイロニカルに描写されている。ロマンチックな西部小説の読み過ぎのため、自ら悲劇の主人公としての妄想を抱き、恐怖にかられていた the Swede が、恐怖におびえている間は何事も起らず、ウイスキーの力によって偽りの勇気を得たとき、死を招いたのである。the Swede は結局、自らつくり出した世界の中で、自らその

犠牲者となったのである。この金銭登録器の場面、「この機械はお買物の総額を記録します」は、冷酷なアイロニーとして、印象主義作家クレインの特質を突に見事に示している。

II

“The Blue Hotel”は、クレインの短篇小説中、最高傑作の一つであり、Hemingway¹³⁾も *Green Hills of Africa* (1935) の中で絶賛しているが、作品の有する意味——テーマ及び象徴——は *The Red Badge of Courage*¹⁴⁾ (1895) の場合と同様、種々の解釈がなされてきている。中心テーマとして従来考えられてきたものを大別すると、① the brotherhood of man と ② determinism がある。もし①の兄弟愛的人間関係がテーマであれば、我々はすべてお互いに責任があり、②の自然主義的決定論であれば、我々にはどれも責任がないことになる。従ってこの両者は全く対照的なものである。

酒場の金銭登録器によってそのアイロニーが示された the Swede の死後、数カ月たった。the cowboy がダコタ州境近くの農場で料理しているところへ、ひずめの音が聞え、the Easterner が手紙と新聞をもって入ってきた。

Johnnie was cheating. I saw him. I know it. I saw him. And I refused to stand up and be a man. I let the Swede fight it out alone. And you—you were simply puffing around the place and waiting to fight. And then old Scully himself! We are all in it! This poor gambler isn't even a noun. He is kind of an adverb. Every sin is the result of a collaboration. We, five of us, have collaborated in the murder of this Swede. Usually there are from a dozen to forty women really involved in every murder, but in this case it seems to be only five men—you,

I, Johnnie, old Scully, and that fool of an unfortunate gambler came merely as a culmination, the apex of a human movement, and gets all the punishment.¹⁵⁾

この story は、我々が、冷酷な自然の必然から生じた犠牲者であり、自分の運命を支配する力が人間にないことを指摘するものと仮定した場合、上例の the Easterner の言葉はどう検討されるべきであろうか。統語的構造、または名詞或いは動詞の如く、基本的な意味を有する言葉ではなく、むしろ単なる修飾語として、the gambler をたとえ、類推することは、the gambler には自分の運命を支配する力がなく、the Swede には更にその力が欠けていることを示している。一つの“adverb”としての the gambler は、何か他の動詞、形容詞、或いは明確な機能を与える他の副詞と連結しない限り、意味のない存在である。ホテルにおける事件が異なった進展をしていたら、the gambler は the Swede によって威嚇されることもなく、the Swede もまた殺害される必要はなかった。the gambler にホテルにおける事件を支配する力が全く無かったことは明白な事実である。従って「このあわれな賭博師は、名詞のようなものでさえない。あいつはいわば副詞みたいなものだ。どんな罪でも共力の結果生れるものだ……あの馬鹿ものの運の悪い賭博師は、ただ一つの頂点として、人間の動きの頂点としてあらわれてきただけで、一人で罰をすっかり引き受けたというわけだ。」という考えが述べられている。The Swede は自分の不完全な、偏見的知识故に死んだ。もし彼が酒場のテーブルでカードゲームをしていた the gambler 以外の三人の男（二人の実業家と地方検事）のいずれかを相手に選んでいたら、たぶん殺されずにすんだことであろう。この点クレインは人間の意志は、自分の運命を支配出事ないことを示したのであるとすることも可能であろう。

一方、テーマを the brotherhood of man という観点から検討した場合はどうであろうか。先ず第一に明白なことは、the Easterner は、人間はすべて責任を分かち合い、他人との連帯の必然性を認識すべきであると主張していることである“Johnnie was cheating... We are all in it.”と述べていることは、自分たちの有罪を指摘し、責任のあることを明確にしている。また、経験に乏しく、感受性もにぶい the cowboy は、the Swede の死に対して、5人の男が連座しているという the Easterner の言葉が理解出来ず、“Well, I didn't do anythin, did I?”と素朴な疑問をなげかけている。この疑問の答えは、当然、「人は互いに責任がある。」という the Easterner の言葉であり、ここに the brotherhood of man のテーマがあると考えることも出来る。

The Easterner の性格を考えてみると、彼は Johnnie の不正を見たが、沈黙を守っていた。彼は meek な人間である。然し作中人物の中で最も冷静なのも彼である。口数は少ないが、Johnnie と the Swede の決闘を止めさせようと努力したのも彼であった。また the Swede の奇怪な反応にも少しも驚かない男であった。この the Easterner もまた、他の男たちと同じく、この story の出来事に或る程度責任ある人間として描かれている。

この story を金銭登録器のアイロニーによって終え、最後の Section IX は取り去った方がよいと主張する人々¹⁶⁾は、クレインを常に自然主義者として扱い、クレインの作品の中に常に一貫性を見出そうとしているのであろうが、クレインの作品は非常に多様性に富んでおり、初期の作品のいくつかに determinism があるからといって、すべての作品にそれを期待することは不可能であろう。Maggie: A Girl of the Street (1893) においては確かに determinism を鋭く追求しているが、以後クレインの自然主義は変容しているのであり、二度と純粹にこの Maggie の世界にはもどらなかつたのである。ホテルの事

件と、the Swede の死との間にある関連は、必然的なものであったのであろうか。このような偶然性は story のプロットには通常あらわれるものである。従って the Swede の死を必然とする、決定論的テーマには疑問を抱かざるを得ない。悪意も真の暴力も存在しなかつた酒場で起きた the Swede の死は、人間の力によっては支配出来ない偶然の悪意の産物であり、印象主義的或は象徴主義的自然主義作家として、クレインはあの冷酷な金銭登録器の場面を結末とすべきであり、モラルを含んだ教訓的な最後の Section は無意味かつまた失敗であるとする R. W. Stallman の主張も、“We are all in it!”と述べる the Easterner の人間的表現はなくとも、それはそれなりにすぐれた短篇小説として成立する点、確かに一理ある説である。然しそれでは何故クレインはこの教訓的な結びを書いたのであろうか¹⁷⁾。我々はクレインの意図を無視することは出来ない。最後の Section は不必要なものでなく、むしろクレインの意図した中心はこの結末にあり、Section I から Section VIII までの the Swede を中心とした人々の反応は、人間の連帯性を扱った結末の導入部分であると考えたい。

III

自然主義的結末に、新しい人間的視点を加えた最後のモラルから、再び story 全体を考察していくと、人間の孤独と communication の欠如が明白となってくる。先ず孤独に焦点をあてると次の事実が判明する。the Swede の「恐怖」を象徴するが如きあのホテルの青さは、「その色合いは、ある種のおおさぎの足についていて、どんな背景の前にたっている、その鳥の所在をはっきり示す、あの色あいと同じものだ。」従って青いパレスホテルは常に「絶叫し咆えたてて」いる。大草原にポーンと一つたっているホテルは、その identity を主張する孤独の姿である。雪が降れば二百ヤード離れたところにある Romper の町は見えなかつた。このホテルは、部屋の

まん中に巨大なストーブを祭る “a proper temple” であり, “godlike violence” でガンガン燃えているストーブは, 戸外の大吹雪や室内の人々に対して不思議な孤立感を与えている。Scully に案内されて, the cowboy と the Easterner は冷たい水で顔を洗うが, その水がまるで, “some kind of a metal polish” と思われるほど, ごしごしまっ赤に顔を見がきあげた。然し, the Swede はただ恐ろしげに一寸指を浸しただけだった。

昼食後, 部屋の窓から大吹雪が眺められた。

The huge arms of the wind were making attempts—mighty, circular, futile—to embrace the flakes as they sped. A gate-post like a still man with a blanched face stood aghast amid this profligate fury.¹⁹⁾

この奔放な狂瀾のまっただ中に, 自失してつたっている門柱は, まさに the Swede の孤独を示している。Johnnie と農夫のじいさんが, カード遊びをはじめ, the cowboy と the Easterner は興味深くそのゲームを見ているが, the Swede は, 男たちからひとり離れて窓ぎわに座り, 自分は, “right in the middle of hell,” にいると考えている。じいさんと Johnnie のゲームが喧嘩となって終り, じいさんが, 大げさな威厳をつくり, 傲然と部屋を出て行った。他の男たちが, 皆思慮深く沈黙を守っている中で, the Swede はひとり声をたてて笑った。自分が危険な西部のまん中にいると信じ, 奇妙な偏見から孤立している the Swede の姿は, ホテル内だけでなく, 戸外においても明示されている。Johnnie を打ちのめした the Swede は, 小さな立木によりかかり, 倒れた Johnnie の上にかがみこんだ男たちの顔を次々と見まわしたが, そこには “Splendor of isolation” があった。

There was a splendor of isolation in

his situation at this time which the Easterner felt once when, lifting his eyes from the man on the ground, he beheld that mysterious and lonely figure, waiting.¹⁹⁾

勝ち誇った the Swede は, 荷造りをすませると, 生気のない眼でぼんやりとストーブを眺めている三人の男たちに, 嘲笑的な一瞥をなげつけ, 戸をあけて吹雪の中へ出て行った。彼はただひとり, 吹雪をまともに受けながら, 並木にそって前方にある Romper の町の方へ歩いて行った。

He might have been in a deserted village. We picture the world as thick with conquering and elate humanity, but here, with the bugles of the tempest pealing, it was hard to imagine a peopled earth. One viewed the existence of man then as a marvel, and conceded a glamour of wonder to these lice which were caused to cling to a whirling, fire-smitten, ice-locked, disease-stricken, space-lost bulb. The conceit of man was explained by this storm to be the very engine of life. One was a coxcomb not to die in it.²⁰⁾

この酒場へ向う the Swede の姿は, まさに孤独そのものであり, うぬぼれだけで生きている人間の姿である。the Swede は自ら求めて一般社会を去り, 自分自身のつくり出す世界へ入って行った。その世界では, 環境にあやつられるというより, むしろ自分の環境をあやつることが出来る人間となる気分であった。

次いで, communication の欠如に目を向けると, 相手を理解しようとする気持のないこと, 或いは理解出来ない人間の無力さが明確に示されている。自ら創造した偏見の世界の中で, ひとり孤立し恐怖におののく the

Swede に対して, “I don't know nothing about you, and I don't give a damn. ...” という Johnnie の言葉, 或いは the Easterner は考えた末, “I don't understand you.” と突き放し, 酒場では酒を強いる the Swede に, “I don't know you.” と the gambler は相手になることを拒絶している。

個々に, 或いは前後関係だけからみると, これらの言葉には深い意味は無いように受け取れるが, 何回となく繰り返される story 全体から眺めてみると, これらの否定的表現が連帯性のテーマに重要な役割をなしていることが分る。また内心では the Swede の立場を理解している the Easterner 以外は, だれひとり the Swede の誤解が理解出来ず, 否定的な立場を固執しており, 直接手を下したのではないから自分たちには罪はないと考えている事実は, Johnnie の “Why, good Gawd, I ain't done nothin' to im.” 及び the cowboy の結末における “Well, I didn't do anythin, did I?” の言葉からも明白である。

大いに善人ぶりを発揮したホテルの主人 Scully も, ホテルの評判と利益を考えた上での行為であり, 真に the Swede を心から理解しようとした努力ではなかった。Johnnie は最初から the Swede には嫌悪感を露骨に示し, the cowboy は the Swede の奇怪な言動にただ当惑するのみであった。Section V の冒頭, クレインは人々の理解に対する欠如を次のように描いている。

At six-O'clock supper, the Swede fizzed like a fire-wheel. He sometimes seemed on the point of bursting into riotous song, and in all his madness he was encouraged by old Scully. The Easterner was encased in reserve; the cowboy sat in wide-mouthed amazement, forgetting to eat, while Johnnie wrathily demolished great plates of food. The daughters of the house, when they were obliged to replenish

the biscuits, approached as warily as Indians, and, having succeeded in their purpose fled with ill-concealed trepidation.²¹⁾

はじめの恐怖から一変して, 凶々しく振舞う the Swede の孤立は益々強められている。Scully は訳が分からぬままだ合槌をうち, the Easterner は沈黙を守り, the cowboy は食べるのも忘れてあきれ顔をし, Johnnie は向う腹を立ててモリモリと喰っている。

更に具体的にこうした理解の欠如を示す劇的な場面は, Section III 及び Section IV の中で, 階下と二階において同時にあらわれる。二階で Scully は, 娘の写真を見せ, Romper の繁栄ぶりを説明し, ウイスキーをすすめて the Swede をなだめるが, 決して理解すべく努力はしなかった。同時に階下では, Johnnie と the cowboy は the Swede の identity を確認しようとするが, 決して理解への態度は示さなかった。

Scully の the Swede との対話の努力は, 一方通行的なアイロニーである。最初彼は, Romper の文明社会, 人間的な面を説明して the Swede の心をほぐそうと試みた。“Why, man, we're goin' to have a line of ilictic street-cars in this town next spring... Why in two years Romper'll be a met-tropol-is.” 然し, 相変らずかたくなな態度で, the Swede が荷造りをするのを見ると, Scully は今度は, 自分の人情深いところを示そうと考え, the Swede を無理やり自分の部屋へ連れて行った。“There, that's the picter of my little girl that died. Her name was Carrie. She had the purtiest hair your ever saw. I was that fond of her.” the Swede が娘の写真にも何の興味を示さないのだから, Scully は長男 Michael の写真を見せ, Lincoln で立派な弁護士をやっていると “an honored an'respicited gintleman” を連発して, 陽気な口調で話したがすべて失敗であった。そこで communication の最後の手段に

と、ベッドの下にかくしておいたウイスキーを the Swede に与えたのだった。この善意から出た酒のサービスが、the Swede を恐怖におのく男から、酒の力で偽りの勇気を持つ傲慢な男に変えてしまったのである。従って結果的には the Swede の死に Scully は大きな責任がある。こうした communication の失敗は、すべて the Swede の本質的偏見に対する理解不足故のものである。the Swede が Scully からウイスキーを受けとり飲んだのも、彼が Scully をやさしい思いやりのある人間として理解したからではなく、彼はひたすら自分の恐怖から逃れる手段として飲んだに過ぎない。このような場面が二階で繰り広げられているとき、階下では Johnnie と the cowboy が別の角度から the Swede の identity を探っていた。然しこの identity の探索は、the Swede に理解と同情を寄せるものではなく、国籍の問題を論じているのだ。

Johnnie said: "That's the dod-dangest Swede I ever see."

"He ain't no Swede," said the cowboy scornfully.

"Well, what is he then?" cried Johnnie. "What is he then?"

"It's my opinion," replied the cowboy deliberately, "he's some kind of a Dutchman." It was a venerable custom of the country to entitle as Swedes all light-haired men who spoke with a heavy tongue. In consequence the idea of the cowboy was not without its daring.

"Yes, sir," he repeated. "It's my opinion this feller is some kind of a Dutchman."

"Well, he says he's a Swede anyhow," muttered Johnnie sulkily.²²⁾

こうして夕食後、the Swede と他の男たちとの間の communication と理解には益々

深い溝が生じ、戸外での決斗、酒場での死へと続いている。the Swede と他の男たちとの間における誤解の中で、第三者的立場を常にとっている the Easterner の役割が最後の Section でモラルを帯びた論理となって示されている。the Easterner は既に述べた通り、最初から the Swede にかかなりの理解を持っていたのであるが、事件の巻き添えになることを嫌い、常に消極的な態度であった。従って the Swede の苦しみや恐怖を感知しながらも、Johnnie の不満に対して、酒を飲ませたから the Swede はもう大丈夫だと単純に考える Scully に、"Yes, Mr. Scully, I think you're right." と受身的な同意を示している。然し、Johnnie を打ちのめして、いよいよ傲慢ぶりを発揮する the Swede に、怒りの気持を吐き出す Scully と the cowboy の仲間入りはせず、ひとり静かに "God-like" のストーブにしがみついた。このときすでに彼の胸中には、結末に見られる、"I refused to stand up and be a man," の言葉へと続く連帯性の哲学があったのである。

Notes

1. この旅行で、Lincoln に立ち寄ったクレインは、the *State Journal* を訪れ、当時ネブラスカ州立大学の三年生であった Willa Cather に出会い、彼女に小説の手ほどきをしている。cf. Willa Cather, "When I knew Stephen Crane".
2. R.W. Stallman and Lillian Gilkes, ed., *Stephen Crane: Letters*, p. 51. クレインは Elbert Hubbard から、西部へ行く前、*Huckleberry Finn* を読むように勧められた。
3. R.W. Stallman, ed., *Stephen Crane: An Omnibus*, p. 479

4. 西部旅行から生れた *Western Tales* は次の六篇である。“Horses—One Dash” (Philadelphia Press, 1896年1月), “A Man and Some Others” (Century, 1897年2月), “The Bride Comes to Yellow Sky” (McCure’s Magazine, 1898年2月) “Five White Mice” (New York World, 1898年4月), “The Blue Hotel” (Collier’s Weekly, 1898年11月), 及び “Twelve O’Clock” (Pall Mall Gazette, 1899年12月)
- 以上のうち, “The Blue Hotel” は1899年出版された *The Monster* に含まれ, 更に1901年 “Twelve O’Clock” がこれに加えられた。他の四篇は *The Open Boat and Other Stories* として1898年出版されている。
5. 渡英したクレインは, 最初 Oxted の Ravensbrook Villa に住んでいたが, キューバから帰った後は, 広大な Brede Place へ移転した。1899年, この Brede Place で開催されたクリスマス・パーティのクライマックスに, クレインは激しく略血し, 同席していた友人の, H. G. Wells, F.M. Ford, Henry James, Joseph Conrad らは, はじめてクレインの重病を知った。
6. “The Blue Hotel” は1898年1月から2月のはじめにかけて書きあげられ, *Scribner’s* や *Atlantic Monthly* に売りこむよう, 友人の Paul Revere Reynolds に1898年2月7日の書簡で依頼している。然し, これらの雑誌社からは拒否され, 4月にやっと *Collier’s Weekly* に300ドルで売ることが出来た。こうしたいきさつはあったが, “The Blue Hotel” は, 発表後の評価は非常に高く絶賛された。
7. R.W. Stallman, *An Omnibus*, p. 481 “Crane visited a desolate junction town

in Nebraska (in February 1895) and saw there a hotel that was painted a light blue”.

8. *Stephen Crane: Letters*, p. 51 On February 13 Crane tried to stop a bar-room fight, “But thus I offended a local custom. These men fought each other every night. Their friends expected it and I was a darned nuisance with my Eastern scruples and all that. So first everybody cursed me fully and then they took me off to a judge who told me that I was an imbecile and let me go, it was very saddening. Whenever I try to do right, it don’t”. Crane here echoes Huck Finn.
9. *An Omnibus*, p. 499
10. *Ibid.*, p. 501
11. *Ibid.*, p. 510
12. *Ibid.*, p. 529
13. Hemingway のすぐれた短篇 “The Killers” ほど “The Blue Hotel” と類似した作品は他にない。両者とも非人格性, 悪の劇的表現, 暴力のアイロニックな手法など総体的類似がある。
14. *The Red Badge of Courage* の第九章最後の一行, “The red sun was pasted in the sky like a wafer.” における wafer のシンボルについて種々論争されてきている。
15. *An Omnibus*, p. 530
16. *Ibid.*, p. 482 Stallman は “The Blue Hotel” は金銭登録器に示されるグロテ

スクな the Swede の死が結末となるべきであると次の如く述べている。“Crane spoiled the whole thing by tacking on a moralizing appendix.”

17. Edwin H. Cady, *Stephen Crane*, p. 157

Cady は人間的現点を加えた結末のモラルについて次の如く述べている。

“Actually, what the addition of that final page-and-a-half does to the story is greatly to enrich it by deliberately reversing its moral perspectives and restoring them to the same challenging

ambiguity between naturalistic and at least humanistic perspectives of ‘The Open Boat.’”

18. *An Omnibus*, p. 501

19. *Ibid.*, p. 520

20. *Ibid.*, p. 524

21. *Ibid.*, p. 512

22. *Ibid.*, pp. 509—510